

36 大阪における薬学校の始まり

大阪大学薬学部・大阪薬学専門学校・大阪薬科大学

中 室 嘉 祐

明治となり、漢方医学の日本に化学医薬品を用いる西洋医学が始まり、化学に無智なため偽薬・混和医薬品が横行し、明治一〇年東京大学に製薬科が併設され東京大学薬学部となった。

大阪では明治一九年大阪薬学校のち大阪薬舗学校が開設し合併し、大阪共立薬学校と改め、北区今井町へ移転した。同校講師森小一郎らは夜間空いた教室を利用し講習会を開き、修了者は昼間実地試験科目を実習できる了承を大槻式校長より得た。即ち道修薬学校・帝国薬専・大阪薬科大学の始まりである。

しかし学校は遠い福島へ移転し、道修町からの夜学の通学は困難となった。大槻校長は福島の校舎を日本橋に移し、大正六年大阪薬学専門学校に昇格させた(私立では熊本に次いで二番目)。施設の拡充のため豊中市蛍ヶ池に一

万余坪を得て昭和五年新築移転し、教授の海外留学(まず村上信三教授は英国ロビンソン教授に師事)入学試験の厳正等の成果を揚げ、大槻校長は昭和一〇年九月退任した。

昭和一三年薬劑中将松南千寿校長となり、滋味深い教育が行われたが敗戦により退任。昭和二一年村上信三が校長になり「大阪薬科大学」として申請準備を完了、昇格の条件に独立した図書館が要望された。図書については広大な図書室に藤本図書館長教授らにより内外の雑誌・学術書が完備していた。本校は道修町の大製薬会社理事であるが、敗戦の打撃により大阪薬専への資金協力など不能な時代、今村荒男阪大総長はまず有力な理事武田長兵衛と密談し大阪薬専の無償寄附の内諾を得て、昭和二三年七月適塾にて阪大側より今村総長、吉松医学部長、田中事務局長ら、大阪薬専側から塩野義三郎理事長、村上校長、米本同窓会代表ら出席し、阪大へ校地校舎設備一切の無償寄附を決定した。昭和二六年医学部に薬学科が設置され、村上信三・生化学、羽野寿・薬理学、上尾庄次郎・薬化学、青木大・薬劑学、川崎近太郎・衛生化学、瀧野潔・分析化学、木村康一・生薬学で開講した。

更に薬学部への独立計画が始まった。大阪大学刊行五十年史には「……医学部より分離し、薬学部が開設されることになった。これは旧帝大系では最初の薬学部の誕生である。文部省の意向としては東京大学がまず薬学部を創設し、京都大学、大阪大学の順を追って独立させることであつたが、本学関係者の努力により他に先がけて薬学部の設置が認められ……」とあるが、東大・京大関係者は努力されなかつたことになる。阪大薬学科だけは旧大阪薬専からの広大な一万余坪の校地建物設備が文部省の国立大学の学部としての基準を満たして、東大京大薬学科は創学以来医学部の建物に寄寓し、文部省の基準に満たなかつたためである。昭和五〇年元大阪薬専の一万余坪と万博跡地とを交換して、六階建、十三講座を完成して移転した。

今井町の大阪薬学校は遠い福島へ移転したため、夜の講習会講師の一人平山松治は道修町の土蔵を借り、明治三十七年五月七日、夜の講習会を再開した(この日を大阪薬科大学は創立記念日としている)。のち昼間部を女子とし、校舎を南久太郎町へ、高津の伝光寺の一室へ移し講義だ

けの忍苦の期間であつた。大正九年阿倍野に新築したがガスは無く、「カンテキと団扇」の本校特有の加熱実習が始まった。校主の平山松治は転任により大正十年廃校宣言したが、忍びずと秋山卓爾は野崎仙太郎・別所熊太郎・神山甚吉・佐藤敏雄・井宮友吉の六教授の合議制で経営することにした。開校以来最大の難局であつた。

大正一三年女性最初の帝国女子薬学専門学校として守口市に新築移転、更に昭和七年松原市に新築移転した。同窓会女子部有志は厳正な学校運営が行われる新しい理事団を東大薬学科慶松教授・日薬会長に懇願し、同教授は京都大学薬学科全教授に依頼され、高木教授は理事長を兼任された。大阪市立大学薬学科へ寄附を試みたが財団に負債があり成功せず、新制大阪薬科大学とし、学長松野俊雄・薬品化学、岡崎二郎・化学、川原吉次郎・生薬学、中室嘉祐・薬剤学、高木誠司・薬品分析学で開学した。前理事団の負債を返還しつつ研究棟を新築し、昭和五九年博士課程を設置した。攝津富田阿武山に一万八千坪を購入し、新築移転を待っている。

(奈良佐保女学院短期大学)